

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	俗文学の伝達者 : 遠山荷塘の事跡新考
Author(s)	樊, 可人
Citation	中國中世文學研究 , 72 : 32 - 47
Issue Date	2019-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047687
Right	
Relation	



俗文学の伝達者―遠山荷塘の事跡新考―

樊 可人

はじめに

筆者は拙稿「遠山荷塘『諺解校注古本西廂記』の成立経緯について」及び「遠山荷塘の『嫦娥清韻』について―江戸後期の明清楽受容に関する一考察―」において¹⁾、遠山荷塘の二つの著作である『諺解校注古本西廂記』と『嫦娥清韻』（関西大学図書館所蔵）を中心に考察を加え²⁾、両書が江戸時代における中国戯曲と明清楽の受容を考える際に重要な存在であることを指摘し、さらに遠山荷塘その人の事跡についても少し触れた。

石崎又造氏が「江戸に於ける唐話学及俗文学の一斑」において³⁾、「化政以後江戸に於ける俗文学者として、就中特筆すべきは遠山荷塘であった」と述べているように、遠山荷塘は江戸時代における中国俗文学受容を考える際に従来注目されてきた人物である。石崎氏のほかに、青木正児氏、山口剛氏、岩城秀夫氏、徳田武氏、中尾友香梨氏もそれぞれの角度から遠山荷塘の事跡に考察を加えている⁴⁾。いずれも特定の一時期のみを取り上げたものであるが、その僅か三十七年の生涯は、これらの研究に

よつて殆ど網羅されている。

しかしながら、現存する彼の作品について、従来取り上げられてこなかったものを新たに加えて考察し直してみたいところ、それぞれの作品に共通して見られる特徴から、自身の著作に対する荷塘の意識が見えてきた。

本稿では、その作品との関係に目を向けつつ、遠山荷塘の事跡に対し、改めて検討を加える。

一、遠山荷塘の著作に共通する特徴

文政四年（一八二一）、遠山荷塘は広瀬淡窓の咸宜園を退塾し、長崎へ遊学した。朝川善庵が荷塘のために書いた「荷塘道人圭公伝碑」（以下、「伝碑」と呼ぶ）に次のようにある⁵⁾。

無幾、去往長崎、卓錫於崇福寺。時年二十六。師素通悉曇之学、兼精声律。於是学唐話於訳司周某。未数年、土音方言莫不通晓。又聞姑蘇李鄴嗣精於音楽、閩中徐天秀妙於梵唄、亦從学之、皆究其精妙。時又有金琴江者善月琴、師尽伝其指法。与江芸閣、朱柳

橋、李少白、周安泉諸子交最親、源源接談、又數以篇章往來。其伝奇詞曲之学、蓋得諸其間云。他若鼓笛箏琶諸技、皆從心悟、不必仮指授。在崎五年余。幾も無くして、去りて長崎に往き、錫を崇福寺に卓つ。時に年二十六。師素より悉曇の学に通じ、兼ねて声律に精し。是に於いて唐話を訳司周某に学ぶ。

未だ数年ならずして、土音方言通曉せざる莫し。又た姑蘇の李鄴嗣の音楽に精しく、閩中の徐天秀の梵唄に妙なるを聞き、亦た從ひて之を学び、皆其の精妙なるを究む。時に又金琴江なる者有り、月琴を善くし、師尽く其の指法を伝ふ。江芸閣、朱柳橋、李少白、周安泉の諸子と交はること最も親しく、源源として談を接し、又た数篇章を以て往來す。其の伝奇詞曲の学は、蓋し諸を其の間に得たると云ふ。他に鼓笛箏琶の諸技の若きは、皆心に從ひて悟り、必ずしも指授に俟りず。崎に在ること五年余り。

訳司周某は周文次右衛門のこと⁶⁾。当時、彼は目附役助（長崎に置かれた通訳兼商務官である唐通事の一つで、主に他の通事の仕事を監督することを司る）を務めていた。さらに、彼が『仮名手本忠臣蔵』を中国語に訳した書『忠臣蔵演義』が現在早稲田大学図書館に所蔵されており、その高い中国語力を知ることができる。周知のように、唐通事は中国語を学ぶにあたって四書五経などの書物を中国語で読解しなければならなかった。後述する

ように、荷塘は周文次右衛門に就いて中国語を学習したが、その著作や他者の作品への評語からは、こうした学習に深く影響されたことが窺える。実際に、荷塘は後掲『嫦娥清韻』の「側注国字例」においても類似の主張を行っている。

一方、荷塘の長崎滞在中に金琴江、江芸閣、朱柳橋が長崎に来航した記録が『割符留帳』に見られる⁷⁾。「伝碑」の記述に拠れば、彼らは荷塘と親しく交際し、長時間語り合い、また頻繁に文章をやりとりした。関連する資料は残念ながら見る事ができないが、遠山荷塘と江芸閣、朱柳橋の三人が田能村竹田の『清麗集』や『秋声館集』に付した評は現在に残されている⁸⁾。例えば、『清麗集』に収められた「相見観」に次のようにある。

老来豪骨銷磨、学頭陀、唯一糸情緒未如何。采菊坐、他思我、我思他、隔断夕陽山外数層波。
老い來たりて豪骨銷磨し、頭陀を学び、唯だ一糸の情緒有るも未だ如何ともせず。菊を采りて坐し、他我を思ひ、我他を思ひ、夕陽の山外に数層の波に隔断せらる。

この詞に対し、朱柳橋と遠山荷塘は次のように評価する。

朱曰、「如孤鶴閑雲超於霄漢。」圭曰、「可想見山莊幽致、亦可想見先生風流。」又曰、「坐字音亮、波字音更

妙。」
朱曰く、「孤鶴閑雲霄漢を超ゆるが如し」と。圭曰く、「山荘の幽致を想見すべく、亦た先生の風流を想見すべし」と。又た曰く、「坐の字音亮らかにして、波の字音更に妙なり」と。

「朱」は朱柳橋のことで、「圭」は荷塘の号「一圭」を略したものだと考えられる。『嫦娥清韻』に「圭按」と、『胡言漢語』にも「圭案」と見え、¹⁰⁾ 荷塘が按語を付ける場合に「圭」を慣用していたことが分かる。
また、『秋声館集』に収められた「綺羅香」には次のようにある。

柳外飛々、楼前啞々、無数帰鴉猶点。輾出冰輪、天宇霧收煙斂。分玉屑、莎砌初篩、散金粉、蘚階輕糝。照深深、密院南辺、有人和影独憑檻。木樨香裏曾見、月也恥他媚嫵。話濃妝淡、漸至如今、歌扇舞衫塵掩。笛微弄、遠閣遥臺。鐘疎度、小橋孤店。感當時、悄立多時、奈風針露砭。

柳外に飛々たり、楼前に啞々たり、無数の帰鴉猶ほ点のごとし。輾り出づる冰輪、天宇霧収まり煙斂まる。玉屑を分かち、莎砌に初めて篩し、金粉を散らし、蘚階に軽く糝す。照ること深深、密かに院の南辺に、人有り影と独り檻に憑る。木樨の香りの裏に曾て見、月も也た他の媚嫵たるに恥づ。話濃く妝淡

く、漸く如今に至り、歌扇舞衫塵に掩はる。笛微かに弄す、遠閣遥台。鐘疎らに度る、小橋の孤店。当時に感じ、悄立すること多時、奈せんや風針し露砭するを。

この詞に対し、江芸閣と遠山荷塘は次のように評する。

江曰、「長調最難得醒。」圭曰、「和影独憑欄」、音響如擊金石。」又曰、「木」声填平声更妙。此等詞曲細微、音韻嘹啞之处。」又曰、「露砭」字音啞。」
江曰く、「長調最も醒を得ること難し」と。圭曰く、「影と独り欄に憑る」、音響金石を撃つが如し」と。又た曰く、「木」の声平声を填すれば更に妙ならん。此等詞曲の細微、音韻嘹啞の処なり」と。又た曰く、「露砭」の字音啞たり」と。

荷塘がいつこれらの評語を付けたのかは詳らかでないが、同じく竹田の作に評が見られる朱柳橋と江芸閣の長崎滞在記録から推測するに、やはり三人がともに長崎にいた期間のことであったと考えられる。「坐字音亮、波字音更妙。」や「露砭」字音啞。」のような評語は明らかに中国語の発音に基づくもので、一定の語学力がなければ、こうした評価を下すことは難しいのではないだろうか。

のちに長崎遊学を終えて亀井昭陽を訪れた荷塘は、昭陽が書いた小説を中国語で読み、次のような評価をした

[10]

先人既没、余作小説体一卷蔵焉。上人為余夏音説之、揚眉稱善曰、「邦人為是、非用話錯、則入口銜骨已。」余固不知夏音、得遇未曾有之人、而聞未曾有之評、恍然覺如先人來摩余頂也。

先人既に没し、余小説体一卷を作して焉に蔵む。上人余の為に夏音もて之を読み、眉を揚げて善を称して曰く、「邦人は是を為し、話を用ふること錯ふに非ざれば、則ち口に入りて骨を銜むのみ」と。余固より夏音を知らず、未だ曾て有らざるの人に遇ふを得、而して未だ曾て有らざるの評を聞き、恍然として先人の来りて余の頂を摩するが如きを覚ゆるなり。

自らの作品を中国語という今までにない角度から評価されたことは、昭陽に大きな衝撃を与えた。また、現在九州大学附属図書館石崎文庫所蔵の『昭陽先生文集』の中にも荷塘が付した評が見られる[11]。

亀井昭陽に別れを告げた荷塘は、旧師広瀬淡窓のところに短期滞在した後、江戸に向かった。彼に就いて中国語を学んだ広瀬旭荘が書いた送別文に次のようにある[12]。

龜子書以告余曰、「汝好詩、詩不善華音、則不能臻其極焉。圭師之華音、殆出瀛入奎者也。汝宜北面而事之。」(中略)余曰、「(中略)師去、吾詩墜矣。(後略)」
龜子書して以て余に告げて曰く、「汝詩を好み、詩

華音を善くせざれば、則ち其の極に臻ること能はざるなり。圭師の華音、殆出瀛を出でて奎に入る者なり。汝宜しく北面して之に事ふべし」と。(中略)余曰く、「(中略)師去らば、吾が詩墜つるならん。(後略)」と。

中国語発音に基づく遠山荷塘の視点は、昭陽だけでなく、旭荘にとっても大変貴重なものであったことが分かる。さらに、文政十三年に刊行された最上徳内の著『詩文押韻策』(慶應義塾図書館蔵)にも荷塘が本書の押韻に関する分析に対して付けた評が見られる。ちなみに、本書の見返しには「荷塘一嘘先生評」と書かれており、荷塘は後述の『訳解笑林広記』に使う「一嘘道人」の呼称を使用している。

荷塘は他者の作品に対する評語の中だけでなく、彼自身の著作の中でも、中国語で読解する重要性を主張している。

先行研究によれば、遠山荷塘は江戸で開いた『西廂記』や『金瓶梅』の読書会にて唐音で作品を音読し[13]、明清楽(主に清楽)を中国語で披露したとされる[14]。前者の『西廂記』読書会で使用されたテキスト『諺解校注古本西廂記』には、王伯良の『新校注古本西廂記』から曲文の発音や音律に関する注が多く引用されており、後者の『金瓶梅』読書会で使用された教材『嫦娥清韻』にも、日本語で書かれた中国語発音付きの曲譜が収められてい

る。さらに、『嫦娥清韻』の「笛色字譜」には「合」「四」「乙」などの音階を表す字すべてに「ハ」「スト」「イ」のように中国語の発音が付されており、『通雅』曰、『合字音似呵、四字似思、乙字似伊、尺字似扯、六字音靈悠切、凡字音似翻高、凡字似泛、五字音鳴。』(『通雅』に曰く、『合』の字 音呵に似、四の字 思に似、乙の字 伊に似、尺の字 扯に似、六の字 音靈悠の切、凡の字 音翻高に似、凡の字 泛に似、五の字 音鳴)と。)と丁寧な音に関する説明まで付されていることから、荷塘が歌詞だけでなく工尺譜を読む時にも中国語を使う方針をとっていたことが窺える。さらに、主に単語や短句の意味、用例を記した『胡言漢語』には次のような例がある¹⁵⁾。

虫殺 虫食菜曰虫殺〔讀作去声〕

虫殺 虫菜を食ふを虫殺と曰ふ〔讀みて去声と作す〕

また、「藜麻」について、

蜀語藜草曰藜麻、「藜」音「涎」。

蜀語に藜草を藜麻と曰ひ、「藜」音「涎」。

このような難読の字について音注が付された例は『胡言漢語』に少なからず存在する。遠山荷塘はやはり中国語で読むことを重視していたため、発音に注意が必要な箇所特に配慮して注を付したのだろう。

ようという意図が潜んでいる。

『訳解笑林広記』の奥付に、

『譯解校注古本北西廂記』 元王実甫填詞、荷塘先生注訳 近刻

『覺世名言』〔一名』十二楼』 清李笠翁述、荷塘先生訳解 同

『譯解注釈琵琶記』 元高則誠填詞、荷塘先生注訳 同

とあるが、現在後ろの二書はいずれも見られない。だが、荷塘が実際にこれらの本の注釈も行っていたとするならば、その意図は、白話小説や北曲に加え、南曲に関する知識をも江戸で開いた『西廂記』読書会のような場を通して人々に教えようとするにあったであろう。またこの二書にも、『譯解校注古本西廂記』や『訳解笑林広記』と同様に、音注や方言、俗語を解釈する語注が付されていたことが推測され、それらは荷塘が中国語学習の中で身につけた知識であると思われる。

二、『黄口雑字類篇』

現在見られる遠山荷塘の著作は前述した『譯解校注古本西廂記』、『胡言漢語』、『訳解笑林広記』と『嫦娥清韻』のほかに、先行研究に全く言及されていないもう一つの著作が存在する。東北大学附属図書館狩野文庫所蔵の『黄

なお、『譯解校注古本西廂記』の前に出版された『訳解笑林広記』は、「訳解」されているため中国語が十分に理解できない人でもある程度内容を把握できるかもしれないが、実際には字音が同じ文字を用いて笑いのツボを設定している作品も数多く見られ、中国語で読まないで理解しきれない部分がある。そのため、荷塘は底本の『新鐫笑林広記』にある音注や語注を保留しつつ、さらに読者が理解しやすいように、自ら音や言葉の裏の意味に関する注を加えている¹⁶⁾。

川上陽介氏は『訳解笑林広記』全注釈(一)において、「僧士詰弁」という話の「余説」で次のように述べる¹⁷⁾。

この話もまた、中国語で音読しなければ意味の通りにくいものであり、このような中国語音がらみの笑話を日本人向けに選んだ和刻本『訳解笑林広記』の選者・遠山荷塘の意図を考えさせられる。当代きつての中国語学者であった遠山荷塘は、自身の語学者としての本領を発揮しなかったのであろうか。この話は、かなり「中国通」向けの話(伝統的な漢文訓読だけでは味わいにくい話)であると言えよう。

川上氏の指摘に補足すると、遠山荷塘は『訳解笑林広記』の中で中国語による音読の重要性を強調しているだけでなく、彼の作品には全般的に、読者に中国語を勉強させ

口雑字類篇』がそれである。

該書は抄本であり、題簽は「黄口雑字集」。内題は「黄口雑字類篇」、右に「文政壬午冬日書於長崎寧遠閣」、左に「信陽鷺湖荷塘一圭著」とある。「文政壬午」は文政五年(一八二二)、遠山荷塘は長崎に滞在を始めて約一年後に該書を著したのである。また、「信陽鷺湖」は広瀬淡窓の『入門簿』に記録された荷塘の住所と合致する¹⁸⁾。

書名からもある程度推測できるように、『黄口雑字類篇』は遠山荷塘が中国語の学習を始めたばかりの頃に幅広く収集した単語を分類しまとめた書物である。

その目録にはまず書名を表すかと思われる「雑字」という二字が書かれ、次の行から一字下げて「宮室」「花草」「樹木」「船具」「身体(残疾)」「菜蔬」「果実」「百工技芸」「禽鳥」「糸布帛」「毛虫」「虫蛇」「兵門」「海味」「珍宝首飾」「茶酒飲食」「衣冠」「商賈」「喪祭」「楽器玩器」「訟獄」「親族」「婚姻女工」「染色」「家財」「雜貨」という二十五項目で、目録に見られる項目数、項目名には多少ずれがある。

全書は基本的に半葉に四行かける九列という書式で書かれており、およそ三九〇〇条の単語を収録している。

項目内の単語数が最も多いのは「家財」の部で、約四〇〇条が収められている。これに対し、「毛虫」と「染色」の二部はそれぞれ約七〇条しか収められていない。全体的に見ると、本書が収録する単語の範囲は非常に広く、遠山荷塘が長崎で書物による勉強を進める一方、中国人と「源泉」として談を接し、又た数篇章を以て往来するたびに、多くの単語を記録していた様子が想像できる。また、収録される単語には二字からなるものが最も多く、三字の語と四字の語がそれに次ぐ。たまに「十八般武艺」（「兵門」）や「素味平生之人」（「雜貨」）のような四字を越える語も存在する。

ほとんどの単語の下に日本語による訳が付されているが、時折単語だけが書かれている場合もある。そのほか、数は非常に少ないが、『胡言漢語』のように中国の書物を引用して中国語の解釈を記すものもある。例えば、「喪祭」の項にある「糝盛」という語について、「公羊伝」や『漢書』に見られる注を引用して「黍稷曰糝、在器曰盛（黍稷を糝と曰ひ、器に在るを盛と曰ふ）」と解釈している。これらの語については、遠山荷塘は『黄口雜字類篇』を書いた時に、未だ適切な訳語を思い付いていなかったのかもしれない。

また、それぞれの条は基本的に一語及びその解釈からなるが、時折次のような形の条目が存在する（「／」は改行を表す）。

武氏の「遠山荷塘と亀井昭陽」には次のようにある¹⁹⁾。

廿三日。借圭師『難字抄』登之。訳通格上、頗費氣力、然得益甚多、不能自休。（中略）夜、抄録、至寅夜、卧即起、灯下又抄、遂畢。

これは甚だ注目すべき記事と思う。昭陽は一圭に『難字抄』を借り、その有益なることを認め、徹夜同然で写し終えた。『難字抄』とは、一圭が様々の漢籍から収録した俗語の解釈書、と考えられる。一圭がそうした書として『記諺』を編んでおり、それが『胡言漢語』の別名か前身かである蓋然性を、私は既に述べておいたが、この『難字抄』もそれらと同じ性質の抄録であり、『記諺』や『胡言漢語』の初期の草稿に当るものではないか、と考える。前述した如く、大儒である昭陽も俗語の学問には不案内であり、だからこそ『難字抄』が自分の学問の弱点を補うものであると認めて、懸命に筆写したのであろう。「訳通格上」は初めて聞く語だが、やはり俗語を抄録した書の名か。

昭陽が記したこの一条は『空石日記』巻十八に見られる²⁰⁾。原文を改めて確認したところ、書名の第一字が「難」字かどうかは非常に判断し難かった。ただ、同書文政七年閏八月二十四日条の欄外に、

酒渣鼻（サイロハナ／アカハナ）（「身体（残疾）」）
画（師／工）エシ（「百工技芸」）
江猪（又海猪／イルカ）（「海味」）
「松／橘」子（マツノミ／ミカン）（「菜蔬草実」）

一つ目は一語について二種の訳を書くパターン、二つ目は同じ意味の単語を一条に合併して書くパターン、三つ目は訳のところにはほかの言い方を提示してから訳を書くパターン、四つ目は全く意味が違うが、一部の文字が重なる単語を一条に合併してそれぞれに対応する訳を書くパターンである。

遠山荷塘の著作について、「伝碑」は次のように述べる。

著書滿家、率未卒業。其僅脱稿者、『北西廂記注釈』、『月琴考』、『胡言漢語考』数部耳。
著書家に満つるも、率ね未だ業を卒へず。其の僅かに脱稿するは、『北西廂記注釈』、『月琴考』、『胡言漢語考』数部のみ。

体裁の不一致から見ても、『黄口雜字類篇』は脱稿した書物とは考えにくい。しかしながら、本書は中国語の初級学習者にとって有益だったようである。その受益者の一人は亀井昭陽である。

文政七年七月二十三日、昭陽のところに短期滞在していた荷塘はある書物を貸した。このことについて、徳田

暮、太郎来告姪浜有雜劇。欲拉宗也去。宗也出涕曰、「尊師君帰去、我無心看戲矣。」

暮、太郎来りて姪浜に雜劇有るを告ぐ。宗也を拉きて去らんと欲す。宗也涕を出だして曰く、「尊師君帰り去り、我心の戲を見る無きなり」と。

と、荷塘が去った後に昭陽の娘の宗が彼を恋しがる場面を記した箇所を見ると、その「雜」字の書き方は前掲の「難」字と全く同じである。そのため、七月二十三日に昭陽が借りたのは『難字抄』であり、『黄口雜字類篇』目録に見られる「雜字」二字を取って該書を指したのだと考えられる。「訳通格上」は、昭陽が訳の意味が分かる状態に至れば次の条に進んだということを言っているのではないだろうか。徳田氏は『記諺』や『胡言漢語』の初期の草稿に当るものではないかと推測しているが、筆者が調べたところ、『黄口雜字類篇』に収録された単語は『胡言漢語』と重なる部分が非常に少ないため、二書は別のもとの見なしたほうが妥当だと考えられる。いずれにしても、前述したように『黄口雜字類篇』は中国人との交流の中で記されており、中国語に詳しくない昭陽にとつて、訳つきであっても消化するのに時間が必要な書物であった。しかし、それまで触れる機会がなかった生の中国語表現からは、得るところが大きかっただろう。

『黄口雜字類篇』は結局脱稿に至らなかったが、他の作品を著す際の翻訳作業の中で、荷塘は本書を作成した

頃に培った知識を活用していたようである。
例えば、『諺解校注古本西廂記』第四折第四套「入夢」に次のようにある。

外浄一行扮卒子上叫云 恰纔一女子渡河、不知那里去了。打起火把者、走入這店裏去了。

「火把」の左には、「タイマツヲ」と書かれている。これは『黄口雑字類篇』『家財』の部に見られる「火把」の語の解釈と一致する。

また、第五折第一套「報第」に、

旦云 書写了也、無可表意、有汗衫一件、裏肚一条、襪兒一双、瑶琴一張、玉簪一枚、班管一枝。

と、崔鶯鶯が張生への思いを贈り物に託す場面が書かれている。その中の「汗衫」は「ハタキ」と訳されており、『黄口雑字類篇』の訳し方と同じである。

前述したように、遠山荷塘は『西廂記』以外に、『覺世名言』や『琵琶記』の翻訳作業にも携わっていた。恐らく彼は、そこでも『黄口雑字類篇』の訳を使用していたのではないだろうか。

三、『音韻發蒙』

荷塘には『韻鏡發蒙』という、「伝碑」には言及されて

いない著作がある。亀井昭陽の『空石日記』巻十八の八月五日条に、

圭師以其著『鏡韻發蒙』乞剡正、乃止研考。圭師其の著する『鏡韻發蒙』を以て剡正せんことを乞ふも、乃ち研考するに止む。

と、荷塘が自著『韻鏡發蒙』を昭陽に校訂してもらおうとしたことが記されている。また、昭陽は「申贈一圭上人序」(『昭陽先生文集初編』巻二)において²²⁾、二日二夜を費やしても該書の内容がさっぱり分からなかったと述べている。

上人之将去、写其所著撰『韻鏡發蒙』者、請余点定其文辞之協否。我未嘗有聞音韻之学。困而閱之。二夜、終不能得厝一辞其所發明之秘蘊也。

上人の将に去らんとするに、其の著撰する所の『韻鏡發蒙』なる者を写し、余に其の文辞の協ふや否やを点定せんことを請ふ。我未だ嘗て音韻の学を聞くこと有らず。困しみて之を閲すること二日二夜、終に一辞の其の發明する所の秘蘊を厝するを得ること能はざるなり。

『韻鏡』は声母を七音(唇、舌、牙、齒、喉、半舌、半齒)に大別し、韻母を四声(平、上、去、入)に分け、

むるか。僕之を勉むる者なり。『音韻問答』の第一章、謹みて之を披翻するに、既に是れ冥海の宝筏為り。獅子座の上の瞎なる長老も、眼皮或いは少しく綻びん。

昭陽は荷塘の江戸における活動が当地の書価を上げたことに感心の意を述べた後、『音韻問答』という作品の第一章を読み、大変驚いたと言っている。

該書について、徳田武氏は「この書も一圭の遺著の一に加えるべきである」と指摘している²³⁾。

『韻鏡發蒙』と『音韻問答』はいずれも現物を確認することができないが、『嫦娥清韻』に収録される「側注国字例」には次のような興味深い記述がある。

凡今和音ト称シ、漢字ニ傍注スルハ、本皆華音ノ呼法ナリ。然レトモ、後世其呼法ヲ辨セスシテ只国字ノマニニ讀過シ来シ故ニ、今ニ至テハ華音ハ自ラ華音、和音ハ自ラ和音ト別レタリ。豈漢字ニ別ニ和音ト称スル者アラシヤ。其呼法ヲ能會得スレハ、自ラ華音ノ義理ニ融通スヘシ。如何トナレハ本彼地ニ留學ノ諸賢、華音ノ蘊奥ヲ学ヒ熟シ、音韻ノ出ル根原ヲ究明シテ国字ニ例ヲ立テ、四声七音一律ニ帰スルヤウニ制シタルモノナレハナリ。蓋我邦ノ人ノ独造ニアルマシク思ハル。精クハ余力著シ、音韻發蒙ニ出ツ。此ニハ只国字ヲ側住スル例ヲ挙示スノミ。今

縦横の図式により漢字音を示す等韻図である。中国では既に失われ、日本にのみ伝存している。「發蒙」の二字が書名に付けられていることから、荷塘が著したのは『韻鏡』についてわかりやすく説明した解釈書か、それに類似した中国語の発音に関する著作であろう。それでも中国語が分からない昭陽にとっては、やはり難解なものにほかならなかった。

一方、昭陽は文政九年(一八二六)、江戸滞在中の荷塘に送った返信「又」(又復圭上人)(『昭陽先生文集初編』巻十三)の中で次のように述べている²⁴⁾。

稗史会講一月二十七、大尺僅得三日間。其然坎。然留錫不日、使天下大都会書價俄騰者、井蛙如僕、未嘗聞有其人也。盛哉。上人且賢勞矣。当此忙々、猶欲有所論著、以破痴闇。上人金剛庶不磷哉。止之乎、勸之乎。僕勸之者矣。『音韻問答』第一章、謹披翻之、既是為冥海宝筏。獅子座上瞎長老、眼皮或少綻矣。稗史の会講一月二十七より、大いに尽くすも僅かに三日間を得るのみ。其れ然らんや。然れども錫を留むること日ならずして、天下の大都会の書価をして俄かに騰がらしむる者、井蛙の僕の如きは、未だ嘗て其の人有るを聞かざるなり。盛んなるかな。上人且つ賢勞なり。此の忙忙たるに当たると、猶ほ論著する所有りて、以て痴闇を破らんと欲す。上人の金剛庶はくは磷ならざらんや。之を止むるか、之を勸

人真・文・先・刪等ノ韻ヲハ子タル字ト云、ナンノ故ナルヲ不知。按ルニ国字ヲ傍注スル時、先ニハセシ、刪ニハサント施ス。其ンハニノオハリヲハ子ル。故ニハ子字ト云ナラン。漢土ニテハ此類都テ入鼻声、又ハ収鼻音ト云。(後略)

右に見られる『音韻發蒙』は従来の研究に紹介されていない作品であるが、『韻鏡發蒙』と『音韻問答』のいずれとも名称に重なる部分がある。「側注国字例」の内容や書名から推測するに、該書は中国語初級学習者向けに音韻を解説する書物だと考えられる。徳田武氏は「遠山荷塘」と『金瓶梅』において、『記諺』という書物は『胡言漢語』の別名か前身かであった可能性が高い」と指摘している²⁵⁾。また、筆者は「遠山荷塘の『嫦娥清韻』について―江戸後期の明清楽受容に関する一考察―」において²⁶⁾、『嫦娥清韻』所収の「月琴」は『月琴考』の一部であったか『嫦娥清韻』そのものが『月琴考』である可能性が存在すると指摘した。遠山荷塘が著作の過程で書名を変えらることは、十分にありうる。すると、いずれも中国語の音韻と関わりのある『音韻發蒙』、『韻鏡發蒙』、『音韻問答』の三作は、結局のところ異名同書であった可能性がある。

『黄口雜字類篇』が中国語の分からない人に単語の意味を覚えさせる入門的な書物だとしたら、右の三作は中国語の発音を指導する入門書と見なせるだろう。以上の

書物による学習を終えた後、数多くの用例を収録する『胡言漢語』によってさらに多くの言葉の意味や使われ方を学んだ上で、『諺解校注古本西廂記』や『訳解笑林広記』を中国語で読み、戯曲や白話作品の知識を含むより上級の中国語を習得する。遠山荷塘は早世したため、残念ながら脱稿した作品はあまり多くない。それでも現在に残る作品からは、荷塘が中国語学習の各段階を意識しながら自らの教材群を作ろうとしていたことが窺えるだろう。

四、月琴の製造

遠山荷塘の著作の中で、『嫦娥清韻』はやや特殊な存在である。何故なら、該書をまるごと勉強するには楽器が必要だからである。しかし、曲の演奏に使われる中国の楽器は誰でも手に入るわけではない。そのため荷塘は、自ら楽器の製造に着手したのである。

『空石日記』巻十八の閏八月二日条に、竹内弥市という職人が月琴を造るために亀井昭陽を訪れたことが記されている。

匠竹内弥市来造月琴。

匠の竹内弥市来りて月琴を造る。

このことについて、昭陽は「書近稿抄後」(『昭陽先生文集初編』巻七)に、次のように述べる。

日より多く、遂に文壇の奇翫と為る。」という記述から分かる。このような状況の中、荷塘は当然ながらより多くの月琴を必要とすることになったであろう。

亀井昭陽の日記によると、遠山荷塘は遅くとも文政八年(一八二五)五月十六日には江戸に着いていた²⁷⁾。同年の十一月十三日、山崎美成、谷文晁、曲亭馬琴などの八人が参加した「耽奇会」に月琴が持ち込まれ、それに関する考証が書かれているが²⁸⁾、これは前掲「月琴」に記す「從學者日多一日、遂為文壇之奇翫。」という状況に影響を受けたものだろう。

一方、『金瓶梅』の読書会に出席した喜多村筠庭は、荷塘が江戸に来た後の活動について次のように述べている²⁹⁾。

江戸に来りて本所表町横町にすめり(中略)西廂記を講じ、所々に行て小説をよめり、また職人をやとひて月琴、提琴を注文して、舶来のもの如く作らせて、崎陽より取寄たるよしいひて望みの人に售る。

職人に作らせた月琴を、荷塘が長崎より取り寄せたものと見せかけて人に売っていた理由ははっきりしないが、松浦静山が遠山荷塘と知り合う前に書いた記録には、

近頃予が門前の近所荒井町と云に、未だ年若き僧なる由、信州の産とか、長崎を遊歴して唐商に学びた

是日、匠竹内弥一者来、上人指教之造月琴。夜四更起、作与広謙吉牘。三日、牘成、登稿句点。日之夕、月琴成。
是の日、匠竹内弥一なる者来り、上人之に指教して月琴を造らしむ。夜の四更に起き、広謙吉に与ふる牘を作す。三日、牘成り、稿に登りて句点す。日之夕に、月琴成る。

竹内氏が荷塘の指導のもとで造った月琴の行方は明記されていないが、荷塘が亀井昭陽のところを去った後も昭陽の娘の宗や村北海が月琴を弾く記述が昭陽の日記や書簡に見られることから²⁶⁾、荷塘が昭陽一門のために月琴を造らせたのだと考えられる。昭陽が書いた「為圭公写小曲跋後」(『昭陽先生文集初編』巻七)に、

其去也、製月琴見留。睹物懐人、猶存恍惚。故余亦手写小曲追而報之。
其の去るや、月琴を製りて留めらる。物を睹て人を懐かしみ、猶ほ存するがごとくして恍惚たり。故に余も亦た小曲を手写し追ひて之に報ず。

とあるのがその証である。遠山荷塘が江戸に移ると、彼に就いて月琴を学ぶ者は日々増えていった。このことは『嫦娥清韻』「月琴」の「余之来江戸、從學者日多一日、遂為文壇之奇翫。(余の江戸に来たるや、從學者日に一

り迎、唐音を善くし、月琴と云へる見馴ざる楽器を弄びける。(中略) 近所なれども由なくして予は未だ面染にあらず。然にその後風聞に、この僧業平橋の畔にて賊に遭たりと云しが、定めし後件は其事なるべし。

とある³⁰。この記載から推測するに、荷塘は財物が奪われたため、月琴の製造によって生計のための利益をはかるうとしたのかもしれない。

荷塘の明清楽は彼の早世のために現代には受け継がれていない。しかし荷塘は自ら月琴を造っただけでなく、その製造方法も普及させた。だからこそ、彼の死後にもかかわらず、梁川星巖が「月琴篇」にいう「戸唱家弾、蟬噪鼎沸。(戸ごと)に唱ひ家ごと)に弾き、蟬噪鼎沸のごとし。」のような状況が発生し得たのだと考えられる³¹。

おわりに

山口剛氏は遠山荷塘の江戸における活動を「彗星の行動」と評しているが³²、これはやはり彼の早世を指しているのではないかと思われる。しかしながら、彼の中国語や戯曲小説、明清楽の普及に対する努力が世にもたらした影響は、決して彼の死とともに滅したわけではない。徳田武氏は「遠山荷塘と亀井昭陽」において³³、「江戸の後期に至ると、中国の俗語に関する学問、即ちいわゆる唐語学は、中期に比して衰えたが、その中であって

独り斯学のために気を吐いた者が、戯曲『西廂記』『琵琶記』を精細に読み、小説『水滸伝』『金瓶梅』を江戸市中に講じた一圭上人こと、遠山荷塘である。」と述べている。従来の研究では、主に当時の文人学者との交流という視点から遠山荷塘が論じられてきたが、本稿ではその著作との関連を中心に考察することによって、中国語学における彼の努力を改めて確認できた。

また、従来の研究に取り上げられていない『黄口雑字類篇』の検討によって、中国語学習の入門段階にあった頃の荷塘の様子を窺い知ることができたほか、『嫦娥清韻』に言及される『音韻發蒙』によっても、中国語初級学習者のための教材を作ろうとする彼の姿勢を明らかにすることができた。拙稿にも述べたように³⁴、荷塘は中国語や俗文学に関する知識を時の権力者や大学者に示すことで、自身の名声や地位を挙げようという考えを持っていた。ただ、そうした知識の益を受けた者は、島津重豪や亀井昭陽のような名を知られた人物以外にも少なからず存在したと考えられる。

一方、月琴は遠山荷塘以前に既に日本に伝来していたが、その製造方法を日本の工匠に対して個人的に指導し、商品として売った者は彼以前には恐らくいなかっただろう。このことも含め、彼の明清楽普及に対する努力がのちの明清楽(特に清楽)ブームの基礎を作ったと言っても過言ではないだろう。

注

[1]「遠山荷塘『診解校注古本西廂記』の成立経緯について」『日本中国学会報』第六十九集、日本中国学会、二〇一七年)、遠山荷塘の『嫦娥清韻』について―江戸後期の明清楽受容に関する一考察―(『東方学』第百三十六輯、東方学会、二〇一八年)。

[2]なお、『診解校注古本西廂記』について、伝田章氏の「遠山荷塘の『診解校注古本西廂記』」(『外国語科研究紀要』第二十五号、東京大学教養学部外国語科、一九七八年)がある。
[3]石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』(清水弘文堂、一九六七年)第六章「各地に於ける支那語学の大勢―白駒―一齋以後―」。

[4]青木正児「伝奇小説を講じ月琴を善したる、遠山荷塘が伝の箋」(『支那文芸論叢』、弘文堂書房、一九二七年)。
山口剛「荷塘印影」(『山口剛著作集』第六巻、中央公論社、一九七二年初版、一九八〇年再版)。
岩城秀夫「僧一圭と亀井昭陽」(『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』、朋友書店、一九七九年)。

徳田武「遠山荷塘と『金瓶梅』」(『日本近世小説と中国小説』、青裳堂書店、一九八七年初版、一九九二年再版)、「遠山荷塘と亀井昭陽」(『明治大学教養論集』第二二三号所収、明治大学教養論集刊行会、一九八九年)、「遠山荷塘と広瀬淡窓」(同第二二三号所収、明治大学教養論集刊行会、一九九〇年)、「詩人広瀬旭莊伝(三) 追補 広瀬旭莊と遠山荷塘また旭莊と原

采蘋」(『江戸文学』第八号、ペリかん社、一九九二年)。
中尾友香梨「江戸文人と明清楽」(汲古書院、二〇一〇年)。
第五章「亀井昭陽を魅了した清楽」、第六章「清楽を広めた文人騒客」第一節「遠山荷塘」。

[5]朝川善庵『樂我室遺稿』(崇文叢書第二輯之五二、崇文院、一九三二年)巻三所収。

[6]頼川君平編『訳司統譜』(私製、一八九七年)巻一に、
文政三辰年五月廿七日目附役助被 仰付候 周 文次右衛門
同九戌年正月十七日 病死

とある。

[7]大庭脩編『唐船進港回棹録・島原本唐人風説書・割符留帳』(関西大学東西学術研究所、一九七四年)所収『割符留帳』には、金琴江、江芸閣、朱柳橋にはそれぞれ三度(巳五番 辛巳(文政四年) 十二月十四日夜入津、未五番 癸未(文政六年) 十二月五日入津、申三番 甲申(文政七年) 七月五日入津、四度(午式番 壬午(文政五年) 六月十八日暁入津、午六番 壬午(文政五年) 十二月十五日夜入津 天草郡崎津村漂着、未七番 甲申(文政六年) 正月八日入津 薩州片浦漂着、申三番 甲申(文政七年) 七月五日入津)、一度(申式番 甲申(文政七年) 七月三日入津)の長崎来航の記録が見られる。

[8]両書とも『田能村竹田全集』(国文名著刊行会、一九一六年初版、一九三五年再版)に所収されている。なお、山口剛氏は「荷塘印影」において、遠山荷塘が田能村竹田の『清麗集』

や『秋声館集』に評を付けたことを紹介している。

[9]『唐話辞書類集』第一巻、汲古書院、一九七一年。なお、『胡言漢語』については、伝田章「遠山荷塘の『診解校注古本西廂記』」(前掲注「2」論文)、徳田武「遠山荷塘と『金瓶梅』」(前掲注「4」論文)によって考察されている。

[10]『送一圭上人序』(『亀井南冥昭陽全集』第八巻下『昭陽先生文集初編』巻二、葦書房、一九八〇年)。

[11]例えば、『昭陽先生文集』巻二「待圭上人(圭上人を待つ)」(其一)と「六月望、懷山士繁、次韻其見寄。此夜、山母来、圭上人鼓琴。(六月望、山士繁を懷ひ、其の寄せらるるに次韻す。此の夜、山の母来り、圭上人 琴を鼓す。)(其一)にそれぞれ「起句余疑其音、圭師以為可。(起句 余 其の音を疑ふも、圭師 以て可と為す。))」、「起句疑音不協、圭師以為可。(起句 疑ふらくは音協はざるも、圭師 以て可と為す。)」という眉注が付けられている。

[12]『広瀬旭荘全集』詩文篇(思文閣、一九八二年)「旭荘文集(新編)」序「送僧一圭序」。

[13]拙稿「遠山荷塘『診解校注古本西廂記』の成立経緯について」(前掲注「1」論文)、川島優子「江戸時代における白話小説の読まれ方―鹿兒島大学付属図書館玉里文庫蔵『金瓶梅』を中心として―」(『中国中世文学研究』第五十六号、中国中世文学会、二〇〇九年)を参照。

[14]中尾友香梨『江戸文人と明清楽』(前掲注「4」書)第五章「亀井昭陽を魅了した清楽」を参照。

[15]前掲注「9」書。

[16]例えば、『訳解笑林広記』(豊橋創造大学附属図書館蔵、和

泉屋金石衛門等、一八二九年)上巻「腐流部」虞糧の「諸生」という言葉には、遠山荷塘により「畜生与諸生音相近(畜生と諸生と音相ひ近し)」という眉注が付けられている。川上陽介氏「訳解笑林広記」全注釈(一)、(二)、「富山県立大学紀要」第二十六―二十七巻、二〇一六―二〇一七年)、『訳解笑林広記』全注釈(三)、「東アジアの古典文学における笑話」新葉館出版、二〇一七年)、(『訳解笑林広記』全注釈(四)、「富山県立大学紀要」第二十八巻、二〇一八年)に詳しい。

[17]前掲注「16」論文。

[18]『入門簿』(『増補淡窓全集』下巻所収、思文閣、一九二七年初版、一九七一年再版)巻八に次のようにある。

入門年月日 住所 氏名 紹介者
文化十四丁丑 信陽諏方鷺湖温泉寺 徒一溪 大超寺超然
春三月十四日 城下

[19]前掲注「4」論文。

[20]『亀井南冥昭陽全集』第七巻所収、葦書房、一九七九年。

[21]『亀井南冥昭陽全集』第八巻下所収、葦書房、一九八〇年。

なお、『韻鏡発蒙』は前掲注「3」石崎書と前掲注「4」徳田氏「遠山荷塘と亀井昭陽」論文に言及されている。

[22]前掲注「21」書。

[23]「遠山荷塘と亀井昭陽」(前掲注「4」論文)。

[24]前掲注「4」論文。

[25]前掲注「1」論文。

[26]『空石日記』巻十八(前掲注「20」書) 文政七年閏八月二十

六日条に、「午酌、宗也鼓月琴。(中略)宗也云、『児、夕夕夢在尊師君側。』(午に酌み、宗也 月琴を鼓す。(中略)宗也云ふ、『児、夕夕にして尊師君の側に在るを夢む』。)」とあり、『昭陽先生文集初編』巻十二「復圭上人外白」(前掲注

[21]書)に「夜、宗之帰自今宿。彈月琴、殆妙。拙荊曰、『恨不使上人聴之。』嗟、上人昔教我児、懇懇懃懃矣。(夜、宗の今宿自り帰る。月琴を弾くこと、殆ど妙なり。拙荊 曰く、『恨むらくは上人をして之を聴かしめざるを』。と。嗟、上人 昔我が児に教ふることを、懇懇懃懃たらん。)」とある。また、『空石日記』巻十八文政七年九月九日条に「与長婿飲。北海来、大鼓月琴、唱小曲大曲。閉目如圭公猶在。(長婿と飲む。北海来り、大いに月琴を鼓し、小曲大曲を唱ふ。目を閉づれば圭公猶ほ在るがごとし。)」とある。

[27]『空石日記』巻二十(前掲注「20」書) 文政八年七月二十六日条に「夜、圭師東至自江戸。五月十六日発也。(夜、圭師の東 江戸自り至る。五月十六日に発するなり。)」とある。

[28]国立国会図書館蔵『耽奇漫録』第二十集「月琴」。

[29]『増訂武江年表』(国書刊行会編、国書刊行会、一九二二年)。

[30]『甲子夜話・第五巻』(平凡社、一九七八年)巻八十。

[31]早稲田大学津田文庫所蔵『星巖乙集』巻三。

[32]「荷塘印影」(前掲注「4」論文)。

[33]前掲注「4」論文。

[34]前掲注「1」論文。